

この戯曲は、日本劇作家大会2014豊岡大会において、豊岡・城崎を滞在取材して書いた作品です。豊岡・城崎の方が使われる分には著作権フリーですが、info@noa-toybox.comまで「」報いただけますよう、お願いいたします。

日本劇作家大会2014
コウノトリ新人戯曲賞
候補作品
豊岡大会

『鞆ノ君』

作 寺戸隆之

キャスト

男

四十歳前後。体系は大柄。表向きは社交的で多弁とまではいわないが話すことは好き。

お婆ちゃん

城崎生まれ。城崎育ち。老人にありがちな話好き、世話好き。旦那と死別。現在一人で城崎に住む。

舞台

間。城崎のロープウェイ乗り場の近く。大師山の麓から山頂までの

城崎温泉。大師山の入り口。
晴れた空が広がる天気の良い春。
温泉寺まで続く山道を歩く人影が見える。
男の歩く足音が聞こえる。

男

私は多分怒っていたんですね。：一緒にあって初めて、いや、その前も怒ったことなんてありませんでした。多少はね、ありましたよ。普通の。まさかね、いなくなつてからこんな気持ちにさせられるなんて。なんだかなあ、本当に。

男

：許せなかつたんですよ。どんどんと膨らんじやつて。気づいたら飛び乗ってました。新横浜から京都。新幹線です。のぞみ。早いですね。新幹線でも。あつという間。ええ、見えましたよ、富士山。(歌い出す)箱根の山は天下の嶮。実は私、箱根の方が好きなんです。滝廉太郎でしたっけ？良く歌ったな。新幹線じゃ箱根は良く分からなくて、富士山はしつかり。：ええ。実は寝ちゃつてました。乗った途端に缶ビールをくいつて一本飲んだら、すぐ。

男

(道の先に目線をやる)一本道なんです。一本。：なんだか一本になった気がしたんです。この鞆と年賀状。こんなものが出てこなければ何にも思わず、疑わずに。：(男は持っている鞆を指し示し)柳行李つていうんですね。これぐらしいの大ききの行李は。(手で示しながら)これぐらいだと飯行李とか手文庫とか。飯行李がお弁当箱で手文庫が手紙とか書類を入れる行李。飯行李。あれすごい。お茶漬けが出来ちゃう。すぐはダメですよ。編目からこぼれちゃいますから。行李におにぎりを入れて置いておく。するとご飯の湯気で行李の網目が詰まる。だからお茶を入れてもこぼれない。買っちゃいました。実は疑っているんです。本当にお茶漬けが出来るか。東京に帰ったら試してやろうと思つて。：全く知りませんでした。こっちにきてから。一週間です。知らないことが色々ありました。私は何にも知らなかった。

男

(足を止めペットボトルの水を飲む。)ふー。ぬるい。美味い。生きてる！くっそー。ロープウェイに書いてある住所にいつか。柳行李を見せ賀状に書いてある住所にいつか。柳行李を見せせて回った。空振り空振り。収穫は何にもありません。空振り。何があつたら収穫なんでもしよう。空振り。空振り三振。一塁ランナーも二塁でタッチアウト。三振ゲッツー。ゲームセット。：あと一本。昨日の阪神の結果です。やることの魚屋さんでホテルイカや干した奴が売つていて、私、ホテルイカに目がないんです。それをあてにビール。福留！バカ野郎！死ぬ！死ぬ！死ぬ！獲らなきゃよかったんだよ。やっぱ、旬が過ぎてるんですよ。旬が。構えが、ない。打てる気配すらない！何にも無い。：

男

(再び歩き始める。)旬が終わっていたんですね。車の営業でした。辞めましたけど。八つ当たりですよ。なんだかどうでもよくなっちゃった。ああ、大丈夫です。そんなんじゃないやせんか。そんな勢いもあります。今日帰ろうと思つただけです。もういいんです。もう。真実が分かつたところで、現実が変わりません。：真実が分かつたところ、城崎の街を上から見やろうと思ひまして。せめて、ね。何にも収穫が無くてもせめて。

男

(少し足早に歩きながら)：手紙が入ってたんです。この柳行李に。持ったら軽くて。そりやそう。中には手紙が一通だけ。軽いはずですよ。

男

(山道の階段を十段ほど一気に駆け登ると不意に止まり、乱れた息を整える。)：「君との思い出を思い、一目一目編みました。」一文だけで。一文だけ。折り目すらも優しくて。大事に大事に仕舞われていたんです。憎たらしいに握りつぶせなくて。一体、誰からの手紙だったんでしょうか。

お婆ちゃんの足音が聞こえる。
男は一人で歩いてきたわけではなく、お婆ちゃんと一緒に山道を歩いていた。

お婆ちゃん

（持っていたタオルで汗を拭いて）いやー、大儀い。大儀いだわ。あんた、ここが温泉寺だ。なあ。大儀なあ。（汗を拭いたタオルを差し出し）これ。ほら。汗拭いて。ほら。水。飲んで。あんた、タバコやる人？タバコはそこ。
：どうも。（と、タオルを受け取る。）

男

お婆ちゃんは自分のタオルを男に押し付けるかのように渡すとお寺の中へ入っていった。

男の視界に温泉寺の前にあるロープウェイの駅が入る。

男

温泉寺駅。：これで半分？ホントか？

温泉寺駅では何人かのヘルメットを被った作業服の男がロープウェイの点検をしている。

男

あれのせいか。なんだよ。ロープが切れてるとか、ゴンドラが壊れたとか：点検だな。こんなもんか。わかったとこでどうでもいいか。結局ここまで来たんだから。

男は道中で我慢していたタバコに火をつけた。

お婆ちゃん

ちよつと。ちよつと。

寺の本堂からお婆ちゃんが男を呼んでいる。

男

お婆ちゃん
どうかしましたか？

男

え？（吸い始めたタバコを気にする。）

男

お婆ちゃん
早く。いいからおいでつて。
：ちよつと待って下さい。

男は吸いかけのタバコを灰皿でもみ消し、お婆ちゃんが手招きする方へと歩いて行く。

お婆ちゃん 上がりなさい。そこからいいから靴脱いで。

早く、ほら早く。

どうしたんですか？

いいから。

あ、はい。：あ、お金払わないと。

そんないいいから。檀家の私が言ってるんだか

ら。いいのいいの。

いや、でも、拝観料：。

見せてあげるから。

何をですか？

こっちこっち。

お婆ちゃんは温泉寺の中へスタスタと入っていった。

男は首をかしげながらもその後を追う。

お婆ちゃんは本堂の奥の奥まで入って行く。

そこには温泉寺のご本尊が鎮座されていた。

二人はその観音様の前に立つ。

男は観音様の持つ静寂さと雄大さに思わずため息をつく。

お婆ちゃん いいじゃろ。

男 お婆ちゃん こうやって毎日毎日手を合わせるの。ありがと

うございます。ありがとうございますって。

：。ほら。いい顔しておられるじゃろ。

男は無言で観音様を見ている。

お婆ちゃんはその男を見ている。

男は観音様を見つめたままその口を開く。

：ええ。

男 お婆ちゃん そうじゃろう。そうじゃろう。

ええ。

男はそのまま無言で観音様に手を合わせた。

道は温泉寺を過ぎた辺りから徐々に本格的な山道に変わって行った。
男のいる場所からは山の下の方になった温泉寺からお婆ちゃん達の楽しいな会話が聞こえる。

男

私はお婆ちゃんとは別れて、教わった通り、温泉寺の多宝塔の脇道から大師山の頂上を目指すことにした。
私の妻が亡くなったのはひと月前の事だった。少し体調を崩したと思ったら転がるように逝ってしまった。妻の遺品を整理して私が引っかかったものがある。後で柳行李とわかった綺麗な編目の靴と差出人の無い住所が書かれた年賀状だ。私はそこから推測される土地へ行くことにした。それがここ。豊岡だった。

男は一度、お寺の方を振り返り、もう一度自分の足に力を込め直す。

男

静かだな。こんな静かなことあったっけ。なあ。ははは。

男

山は静かだった。
山の足音と荒い呼吸だけが聞こえる。

いい天気だ。(男は汗を拭う。) やっぱり晴れるんだよな。言ったろ。傘なんていらぬ。雨は降らん。な。：準備なんてしたことなかったな。そういうのは全部お前が：。

男

男は横を見る。
もちろん横には誰もいない。

：これにも慣れなきゃな。そもそもお前がいけないんだ。「私より一日でいいから長生きしてね。」無責任なこと言いやがって。するさ。してるよ。一日以上してやってるよ。文句ないだろう。一ヶ月とちよūd十日。もういいか？もういかる？はは。熊が怖い。怖いな。お前は怖くなかったか？熊がでるんだって、この山。でたら、こんな風に構えて格闘家みたいに戦うか。熊殺しの何某って言われたりしてな。ああ、ダメだ、震えてき

た。足が震えてるよ。ははは。そんなもんだ。いざとなったら：怖かったか？怖かったよな？こんなもんじゃやない。もつとだ。もつとこいよ。こんなもんなわけやない。わけがない。わけがないんだ。：怖かったな。ごめんよ、ごめんな。

男は水を飲もうとペットボトルを出すが中身は空っぽになっ
ていた。

男

からか：なあ、どうしてだ？何が不満だった？休みがないことか？帰りが遅いことか？お前の話ばかりやんと聞いてたぞ。聞ける範囲でだけだ。俺だつてな、必死だった。わかってくれたんだろ？それともあれか、食後のオナラか？風呂の後にトランクス一丁で歩き回ることか？靴下と下着をわけないからか？何なんだよ。黙ってちゃ分からな
いよ？

：分からんよ。どうしてだよ？

男 男

誰だよ？誰だ？「君との思い出を思い：」だと！ふざけんよ。誰が許した？俺は許してないぞ。そもそも聞いてない。いや、聞いてたって許すもんか。許すわけないだろ。：誰なんだよ？お前は一体、誰とここにいたんだ？なあ、どのどいつだよ？

男

ただの旅行のつもりか？俺は聞く耳、持たなかつたな。忙しいの一点張りだ。あてつけか。あてつけなだけだよな。あてつけならいいか。あてつけなら許す。許すからさ。：本気だったのかなあ。

え？ああ、うん。

男 男

そうだよ。うるさいな。わかつたつて。大丈夫。心配なんて必要ない。だからうるさいつて。静かにしてくれよ。そう、そうだよ。わかればいいんだよ。最初からそうしてくれれば、

男

あれ？ここどこだ。うるさいつて。ここはどこだ？どこだつて聞いているんだよ。お前はいつつもそうだ。俺が聞いたのは：いいか。大丈夫なんだ。大

丈夫だよ。この道行けばあつてゐるから。勘だよ。勘。俺の勘は当てるんだ。お前も知つてゐるだろ。そう言え、俺の靴下知らないか？いつもの場所がないんだ。それじゃないよ。黒じゃなくて、ほら。グレーの。何でだよ？お前が仕舞つたんだか。俺は知らん。知らんからな。もう知らない。頭きた。出るぞ。そうだよ。この街を出るんだ。ごちゃごちゃごちゃごちゃうるさいんだよ。恋愛は自由だ。ロミオとジュリエットなんて大昔の話じゃないか。豊岡と城崎に国境なんてない。愛にも国境はない。なんてな。言い過ぎかな？でも決まつてたろ？決まつたろ？どこに行きたい？え？そんなところに行きたいのか。どうしてだよ？よりよ。温泉か。温泉ね。それだけは譲れないか。そうだな。そうだよな。うん。あつたよ。違ふよ。靴下じゃなくて。あれはもういい。いいんだ。え？そうだよ、あつたよ。え？ああ、すまん。俺だ。俺が靴に仕舞いこんでた。うるさいな。そんなことはどうでもいいだろ。お前が気に入る場所があつたんだ。間違いない。絶対に気に入るぞ。東京だ。東京というか神奈川の箱根だ。(歌い出す。)

箱根の山は天下の嶮。知らないのか？滝廉太郎だ。有名な温泉地だ。お前も安心だろ？箱根も城崎に負けず劣らず、いい温泉があるんだつてさ。：だからさ、俺と一緒に来てくれないか？なんだよ？何笑つてゐるんだよ？いいよ、もういい。なし、今のは全部なしだ。え？だつて？だつてなんだよ？は？殊勝じゃ悪いか？あるよ。あるんだよ。俺にだつてそういう時ぐらい。え？え？え！？本当か？いいのか、いいんだな。よし。決まつた。今更無かつた事になつてなからな。ははは。決まつた。決めた。やつたぞ！な、あつてたろ。この道を来て。は？どの道つて、この道だよ。この道。うるさい。わからぬならいい。わからぬならいい。一生わかるな。一生：すまん。あ、いや、なんていうか、この道だ。意地悪しないでくれよ。そういうのはどうも苦手だ。苦手なんだよ。知つてゐるだろ？(急に真面目な顔になつて)：あ(い

男、誰かに肩を叩かれたかのように振り返る。

男

何だよ？今、大事なとこなんだ。邪魔するなよ。察しろよ。夫婦の時間って奴だ。やっとなんか。くだ。こんなことになってやっとなんか。た。邪魔なんかさせないんだ。はーん。わかつた。わかつたぞ。お前だ。お前がいつの相手が。なるほど。背は高いし中々いい体してるじゃないか。うるさい。止めるんじゃない。一発と言わす。何発でもブン殴ってやる。おい！卑怯だぞ。まずは顔を見せろよ。名を名乗れ。

男

男は見えない何かに掴み掛かる。
しかし男が掴み掛かった先には道が無かった。
山道から足を踏み外し崖を転げ落ちる。
大きな音がした後、山には再び静寂が訪れる。
しばらくして男はゆっくりと立ち上がる。
腰を打ったのか摩りながら痛そうにしている。

男

男の目の前には普通にはあまり見られない背の高い細い竹の様な植物が覆い茂っている。

男

男はこり柳を一本一本丁寧に見る。
その眼は今までの男の目ではなく、職人の目をしている。

：いい。(不意に)なあ、お前！これがこり柳だ。
柳行李の材料だ。お前に見せたかったんだ、お前に。珍しいよ。自生でここまで立派なこりやなぎは。すごいぞ。いい。いいぞ。これをな、編むんだ。

男

男は見えない何かを編み始める。
男の動く様は柳行李を作る作業風景そのものである。

簡単そうだから。そう見えるよな。じゃあお前もやってみるか。ほう。やるか。この板に乗って糸を引つ張る。何だよ？分かるのか？そうかそうか。じゃあやってごらん。

男は笑顔でこり柳を見つめている。

男

ほらな。やっぱりだ。簡単じゃないのが分かるだろ。見た目より大変なんだ。女子供の力じゃ難しい。ここが、腕っ節が必要なんだ。でもそれだけだ。それさえあれば誰にでも出来る。この繰り返し。糸を回して編む。こうやって。

回して回して。互い違いに。

回して回して。糸を引く。

回して回して。互い違いに。

回して回して。糸を引く。

回して回して。回して回して。

回して回して。回して回して。

回して回して。回して回して。

回ってたか？

回して回して。回して回して。

互い違いに糸を引く。

回ってたよな？

回して回して。回して回して。

互い違いに糸を引く。

回りくどいか？

そうか。すまん。俺、そうやって今まで来たんだ。

変わらんよ。変われない。回して回して。

ああ。お前に甘えてばかりだ。

男 今まで軽やかに動いていた男の手が止まる。
男には妻の姿が見えている。

男

ん？何だ？俺はどうしてた？どうしてこんなこと知ってるんだ？え？なんだ？おい。何を泣いてる？なあ。

男

：そうか、そうだったのか？俺だ。俺がいけなかったんだ。俺が全部忘れてしまってたんだ。柳

男 行李を編んでいたのも。捨ててしまったのも。この街からお前と逃げ出したのも。俺が。

男 え？ そうだよって：お前、見てたのか？ ずっと見てたのか？ そうかそっか。ずっと見てくれてたか。今も、今までも。そうかそうだったか。

男 え？

男 なんだ？ 何だよ？ わからないよ。なあ。

男 男の耳には確かに妻の音が聞こえていた。山は静かなままだった。木々が揺れる音、それだけが聞こえている。それでも男には妻の音が、妻の声だけが聞こえていた。

男 (泣きながら) そうかそうか。わかったよ。わかったから。また編むよ。もう一回編んでみるさ。知ってる。知ってたさ。お前がずっと見ていてくれたことは。だからな、お前との思い出を思い、一目一目編むからな。：うるさいな。ずっと見るな。覚えてた。もう忘れない。

男 男の目には頂上におわす金色の観音様が見える。

男 ああ、君はもういないんだな。そっか、そうか。ありがとうな。一目一目編むからな。

男 男はこり柳を優しく抱きしめる。

男 …うん。待ってるよ。

エピソード

男 男は山を降りて温泉寺まで戻ってくる。遠くにおばあちゃんが立っている姿が見える。おばあちゃんは大きく手を振って「おい。」と男を呼んでいる。

男は少し足早になりおばあちゃんの元に駆け寄った。

お婆ちゃん

あんた、無事だったかね。良かったよ。中々戻って来んから心配しとったのよ。熊にでも食われたんじやないか思つて。熊よ。熊にね。あんた、昨日熊が出たつてラジオで言つとったから。

男

ちよつと。それ先に言つて下さい。お婆ちゃんが言つたんですよ。歩いて登れるつて。だから大丈夫でした。あ、そうだ。お地藏さんが引っくり返つたりしてて驚きましたけど。

お婆ちゃん

あれま。それは大儀だったな。

男

起こそうとしたんですけど僕一人の力じゃどうにも。住職さんに言つておきました。

お婆ちゃん

言つてくれたん？ありがとな。ありがとう。頂上にありましたよ。観音様。綺麗なお顔でした。

おばあちゃんはじーっと男の顔を見ている。

男

：どうかしましたか？

お婆ちゃん

あんた、仏さんみたいな顔になったな。

お婆ちゃん

え？
うん。いい顔しとる。

終

※作品の著作権は作者に帰属します。無断での上演・掲載・配布は固くお断り申し上げます。無断での上演・掲載・配